

〔報告〕

還流する展示に向けて

二つの試み——「おしゃべりギャラリー」と「彫刻を遊ぼう！」

佐々木 奈美子

仕事の上で、決して忘れられないような喜びを味わったことがありますか？ 幸運にも、過去に二回、そういう経験をしました。『紀要』が相応しいかどうかわかりませんが、今や学芸員を続けていく心の支えのような、この二度の機会について、この場を借りて報告します。

一つ目は、1997（平成9）年の企画展「20世紀美術の冒険—アムステルダム市立美術館展」の会期中に行った「おしゃべりギャラリー」という解説会のようなイベントです。二つ目は、翌1998（平成10）年の夏に常設展示室の一部で行った「彫刻を遊ぼう！」という小企画です。

平成9年と10年という、それぞれ異なる機会ではありましたが、おそらく、発想は連続していたと思います。館内の理解を得るために何度も繰り返しミーティングを重ね、準備に時間をかけた上での実現でしたが、いずれも、それだけの価値はありました。

「この段階でまだこの程度のことをしていたの!?!」と先進的な美術館の方なら逆に驚かれるかもしれません。しかし、美術館の歩むペースや、取りまく環境は千差万別。たぶん、何らかのタイミングなり、気持ちなりが重なりあった時に、そこに応じた花が咲くのだと信じて、本題に入ります。

☆おしゃべりギャラリー

1：ネーミング

この「おしゃべりギャラリー」という名前は、準備を進めてから、かなり後の段階で定まったものです。実際にこの名称が使われたのは、参加者募集の時からでした。それまで館内のミーティングなどでは、わかりやすく「解説ボランティア」、あるいは「鑑賞者による解説会」などと呼んでいました。

2：きっかけ

この企ては、ある展覧会の開催が契機となりました。新潟県立近代美術館では平成9年5月28日から7月20日まで行われた「20世紀美術の冒険—アムステルダム市立美術館コレクション」展です。

セザンヌやファン・ゴッホから20世紀美術の流れを大きく辿るこの展覧会は、平成9年3月にオープンした宇都宮美術館の開館記念展でもありました。アムステルダム市立美術館の全館閉鎖にタイミングを合わせて主要な蔵品の大半を借用し、また、宇都宮美術館をはじめ関係各位の尽力が深く、充実した作品が並ぶ得難い機会をいただきました。

当館にとっては、平成5年の開館以来はじめての、20世紀美術をまとめて紹介する展覧会でしたが、内容についての心配は殆どありませんでした。むしろ、担当にとって検討すべきは、新潟県の来館者にとって本展がどういう意味を持つか、その点に絞られていました。それが逆に、この機を逃す手はないと思い切った理由でもありました。

3：拒否反応

その当時、担当は多くの来館者から、現代美術に対する拒否反応ともとれる発言を、しばしばいただいていた。それは、ほとんど日常的といってもよいほどに頻繁なことでした。

この手の不思議は時々感じるのですが、数年前まで常識とされていたことが、今となっては現実感の薄い遠いことのように思われる事例がいくつかあります。「現代美術への拒否反応」は、その最たるもののように感じられます。もっとも、当時であっても、その反応は美術館に「もの申す」タイプに顕著な傾向だったのかもしれないし、逆に、今日の沈黙が、そのまま鑑賞者たちの内心の声をそっくり反映しているとは

限りません。皆がみな、思っていることを口にするとはい限らないからです。しかしながら、この5年の間に県内で行われてきた様々な努力が確かな影響を及ぼしていることは間違いなく、そのことは各方面に感謝するばかりです⁽¹⁾。

とにかく、いずれにせよその時点では、一般来館者の中に現代美術に対する拒否反応、あるいは、アレルギーとでも呼ぶべきものが、無視しがたい大ききで存在していたことは確かでした。

何とか、敷居の高さを感じず楽しんでもらえるような方法、日常生活と隔たりのある特別なものとして割り切られてしまわないような工夫をしないと、ただ展覧会をしました、というだけで終わってしまうのではないかと懸念されました。

4：アレルギーの正体

個人的な印象でいえば、現代芸術否定の声は、しばしば感情的な場合も多く、かなりの部分は誤解に基づいているようにも感じられました。

「何か難しいものなのではないか」「自分の感覚や、考え方を否定されるように感じる」「一部の特定の人たちに関係するものなのでは?」「理解できない」「その上、理解できないとわかったが最後、無知無能よばわりされそう」「優れた作品だと説明されたからといって、なぜそれを頭から受け入れなければならないのか」「おまけに高い!」……etc.

当時よく言われたことの数々ですが、時間をかけて話し合う場さえあれば、その一つ一つに対して説明を用意することができそうです。しかしながら、少し冷静になって考えてみるならば、感情論とも受け取れるそれらの言葉の中には、誤解に基づいていると思われるのと同じくらいに、どこか真実が含まれていることも否定できないようにも思われました。少なくとも、それらが根ざしている感覚は、健康なのではないのでしょうか。

どこか誤解を生むような背景があって、その責任の一端を美術館が生み出しているのだとしたら、それはとても悲しいことです。せっかく美術作品に接しようとしても、それらを扱う専門家集団から、周辺に置き去りにされるような気持ちを味わわされている(と思ひ込む)のでは、確かにつまりません。

ここは一つ、そういうつまらなさを生み出しているのが、他ならぬ人間の心であって、作品自体のせいではないという

ことを、何としても、わかってもらいたい——しかしそのためには、ただ思うだけではなく、行動することが必要でした。

何かできないか、と考えていた矢先の「20世紀美術の冒険展」は、まさに最適な、魅力のある展覧会に思われました。そして、展覧会のタイトルのまま、担当者も秘かに冒険の計画を練りました。会期がゴールデンウィークから後ろにずれて、あまり集客を期待できる時期ではなかったことも、かえって、冒険に乗り出すには相応しいように思われました。

5：計画

問題の根本は、美術館から鑑賞者に向かって情報なり知識なりが提供されるという、その「一方向性」ではないか、という問いから計画はスタートしました。権威を拒否する力を持っているはずの作品を前にして、オーソライズされた価値観を提示することに対しては、以前から疑問を持っていました。矢印の向きをどこかで変えてみたいと、常々思っていたのです。

そこで、美術館は発言を控えて「きっかけ」に徹し、鑑賞者の側から発信してもらうような機会を設けようと考えました。先入観のない、きれいな目と頭で、作品を語ってもらえれば、何か別のものが見えてくるかもしれません。

館内ミーティングに提案した時までは、おおよそ次のようなアウトラインを考えていました。「数名を公募し、ある日の不特定の来館者たちに、彼らが交互に語りかけながら展示室を一巡する。学芸員は同行するが説明には加わず、オブザーバーとして、何か問題が生じた場合にのみ介入する。アドリブあり、ギャラリーとの質疑応答あり、発言者相互も含めた不測の議論もあり。ただし、最終的に本番をどのような形式で進めるかについては、公募で選ばれたメンバーが、最適と思われる方法を話し合っ決めて……」。

6：館内調整

このような試みが、内部的にすぐに了解される筈ありません。「アムステルダム展」の担当者内部で意見交換をしてから、学芸課の会議をはじめとする打ち合わせを重ね、その中で少しずつ、やりたいこと、やろうとしていることを説明し、理解を得られるように努めていきました。それらは一見、無駄とも思える一進一退の歩みでしたが、あとあと必要不可欠な過程でもありました。その時間の中で、問題点を洗い出し

註

(1)たとえば、忘れがたい2000(平成12)年の「越後妻有トリエンナーレ」の他、新潟市美術館、新潟市美術館など県内各地において行われてきた企画展。さらには、この3月31日をもって残念ながら閉廊となる新潟市内のギャラリー「アトリエ我廊」の活動などを紹介させていただきます。

ながら、少しずつ賛同者を増やしていったからです。

たとえば、平成9年2月12日、学芸課普及係のメンバーと担当の打ち合わせの時のメモによると、この企画を「広く一般から美術に興味を持つ人を募り、数回のミーティングの後、来館者の前で解説してもらおう。ボランティアに相当する」などと説明していました。メリットとしては「象牙の塔から美術を救い出し、近づき易いものにする」「先入観のない目と頭で作品を語ってもらう」「今まで美術に興味のなかった層への普及効果」などを上げ、問題点として「将来のボランティア構想への足枷とならないように単発のイベントとすべき」「応募多数の場合の選別法」「場所、ミーティング回数の確保」などが手書きされています。

3月6日までは、実施日とそれに向けてのスケジュール、募集人数(5~6名)、募集要項などを決め、選抜方法が抽選から選考に変更されるなど、より理想的な形に近づいていきました。応募年齢は「20歳以上」ということになり、「おしゃべりギャラリー」という名称が付けられました。

7：公募

イベントの正否を分けるのは、実際に会場で発言をする5~6名の人選であろうと思われました。平素から人前で話す立場にあるような人、特に美術通、あるいは美術館に近い位置にいる人を最初から当てにするのは、本意ではありませんでした。

むしろ、普段は自分の考えを口に出すような習慣がない人。できるならば、それでいて内心には熱い思いがあり、借り物ではない自分の言葉で話してくれる人が望ましい……。そう考えると、公募は大原則としても、その選抜の方法については慎重に進める必要がありました。

事務的な公募のやり方として参考にさせてもらったのは、NHK新潟放送局の視聴者モニターの募集です。局の担当の方に基本的な募集方法、留意点や問題点などをうかがい、美術館なりの変更を加えました。

応募に際しては「経験や資格はいっさい不問」とし、ただ、「日頃美術、あるいは現代美術に関して考えていることを、400字詰め原稿用紙一枚程度にまとめ」て、添えてもらうことにしました。広報の文章には「(出品作家の)名前を知っている必要は、まったくありません」。あるいは「展示作品を通して、美術への熱い想いを語ってみませんか？ 現代美術がお好きな方、そして苦手な方、どちらも大歓迎です」などと入

れてもらいました。

このような問いかけに、何らかの応えが返ってくることを祈るような気持ちでした。

8：人選

館内調整に思いのほか手間取ったこともあり、実際に募集を告知した期間は短いものでした。広報誌「ながおか市政だより」4月号、および「新潟日報」4月16日の記事により、締切日の4月21日までに届いた応募は、募集人数のおよそ倍の12通でした。

募集要項の中には、事前打ち合わせと本番を合わせて6~7回は美術館に来る必要があること、交通費等は自己負担であることをうたっていました。そのような条件を承知の上で応募された方たちの文面からは、やる気のほどが伝わってきました。

23日午前、美術館の係長以上と担当が選考に当たりました。選考基準は、準備の過程で話し合っていた通り、県内の各地域から選ぶこと、職業として普段から発言の機会が多く話し慣れているような人に偏ることがないように考慮しました。もちろん何よりも、熱意が感じられることは第一条件ではありましたが、しかし例えば、大変熱心でいらっしゃっても、大学で教えているような方にはご遠慮願いました。また、美術史通であることが文章からにじみ出ているような方も、残念でしたが、また別の機会ということにしてもらいました。生の感情、素の感覚が欲しかったからです。

そして選ばれた6名は、結果的にとても理想的なグループでした。県内の上中下越それぞれの地域から参加者があり、また、年齢的にも職業的にもバラエティに富んでいました。女性の4名には主婦の方と、職業をお持ちの方の双方がいましたし、美術館ではなぜか少数派の男性からも2名をお願いすることができました。そして、4月27日の初顔合わせから、つごう5回にわたる事前準備が始まりました。

9：メニュー

準備期間として我々に与えられていた時間は、短いものでした。日曜日の午後4回、それぞれ13:15~15:00の2時間弱が基本です。加えて、自由参加の「開場式・レセプション」の日を入れても、全部で5回。その後は、2度の本番を迎えることとなります。会場には、美術館内の講座室を使用しました。全体のメニューとして、おおよそ以下のようなカリキュ



fig. 1 打ち合わせ。美術館内講義室にて



fig. 2 同左

ラムをはじめにお渡ししました。

- 初回：4月27日 親跡副館長の挨拶/自己紹介/本展覧会
と「おしゃべりギャラリー」の趣旨説明/
フリートーキング
- 2回：5月11日 課題「人前で話すことに慣れる！」/横山
普及係長によるレクチャー/フリートー
キング
- 3回： 25日 実作品の確認（展示作業の見学）/おおよ
その段取りを作る/小見学芸係長による
レクチャー/フリートーキング
- (特)： 27日 展覧会開場式・レセプション（自由参加）
- 4回：6月1日 リハーサル/意見交換

4月27日、初回に担当がまず切り出したのは、最終的にど
ういう形のイベントにするかを決めるのは、集まった6人
の皆さんだ、ということでした。上記のようなカリキュラム
はあるものの、その通りに進める必要はない。むしろ、発展
的であるのなら、形はどんどん変わって行って構わない。
そのためには、フリートークの時間をできるだけ大切にして、
どんどん発言して欲しい、ということをお伝えしました(fig.
1-2)。

実際、4回（プラス1回）のメニューの中には、美術館員
からのレクチャーなども含まれていて、発言者同士が互いに

話し合う時間はさらに限られてきます。無駄に過ごす時間は
ありませんでした。とはいえ、初日から自主的に話し合うと
いっても、難しいものです。この日は、自己紹介を兼ねて、
それぞれの興味の対象、美術に関する体験などを皆に話して
もらいました。

10：発言者たち

- ・黒柳修一さん。長野県で生まれ、現在は中頸城郡妙高村に
お住まい。制作者と鑑賞者をそれぞれ全く別のものと考えて
いた。美術館を象牙の塔のように感じていた。高校時代に複製
画を見てから美術に興味をもった。
- ・南蒲原郡栄町から参加の小林真弓さん。1歳11カ月のお子
さんがいる。農家に嫁ぎ、最初は大変だったが、子どもの視
点でもの見るようになったら、目に映るものが新鮮に感じら
れるようになった。自然を見るときなど特に。
- ・敦井美奈子さん。新潟在住。生まれは長岡で、現代美術館
でグランドピアノの壊れたようなオブジェを見た。小学校4
年の時に見たゴッホの《糸杉》。現在では各地の美術館をまわ
るのが楽しみ。小学校2年生のお子さんのおかあさん。
- ・長谷川正子さん。仕事をお持ちの女性で、北蒲原郡豊浦町
から指定休をとって参加。スキーに行った帰りにシャガールの
版画を見た。その時々で、同じ作品でも自分の感想や印象
が変わっていくのが面白い。

・長岡の松永崇子さん。子育てが一段落してみると、自然と以前よりも無理しなくなっている。美術に対する感覚も変わり、近づいていっている気がする。教養のためというより、生活の中に美術を取り込んでいく感じ。

・山本弘さん。長岡在住。中学校の英語教師を退職したばかり。中学生の時、長岡市公会堂（現厚生会館）で展覧会や映画リーフェンシュタールの「民族の祭典」を見た。その時に初めて見たセザンヌの静物画。忘れられない。

ここでは100字程度にまとめましたが、実際にはもっと長く話してもらいました。割り当て時間として、お一人あたり10分間をお願いしたのです。普段から話し慣れていれば別でしょうが、実際、10分間を一人で話し続けるというのは並大抵のことではありません。中には、いきなり大変な苦行を課せられたと思った方もいたでしょう。長時間話し続ける、ということは、普段は口にしないような個人的な事柄や、忘れかけていたような思い出にも分け入っていかざるを得ず、終わった頃には、皆ふらふらでした。

11: 勉強しちやダメ!

最初に顔合わせをして自己紹介した日から、次に皆が集まるまでの間には2週間ありました。始めに一人一冊ずつ展覧会カタログをお渡ししていたので、それぞれ調べたり、掲載されている文章を読んだりする時間はたっぷりであったはずですが、

しかし、皆さんに厳重にお願いしたことだったので、展覧会の出品作品や作家について、決して勉強しないで欲しいと、伝えてありました。カタログに掲載されている作品の絵柄を眺めるのは結構だが、どうであれ、それ以上は踏み込まないでいただきたいと、少し強引なくらいにお願いをしました。

当然、その点に関しては6人からも反発がありました。人前で話しをする以上、事前に準備するべきではないか、材料がないと不安だ、と。それは当然の抗議でしたが、敢えて、これは不可欠のことと、きつく申し上げました。

もうすぐ、実際に作品が到着します。それらを初めて目にした瞬間の感動、もしくは、拍子抜けしてガッカリした気分、そういったものが欲しかったのです。事前の準備は、時に私たちの目を曇らせます。見る前から知っているような気持ちになることだけは、避けて欲しい……。そういうわけで、不安や不満があるのは承知の上で、この点だけは、まげてお願

いしました。

12: 衝突

そして迎えた2回目。5月11日。この日は「人前で話すことに慣れる」ことをテーマに、それぞれ持ち時間3分ずつのスピーチを行いました。内容よりも技術的なことにポイントを絞り、「大きな声で、はっきりと」「要点をまとめて」「姿勢や目線に気をつけて」が課題でした。同僚の宮下学芸員に協力を頼み、一人ひとりについて忌憚のない感想とアドバイスをもらいました。続いて、横山普及係長から「解説会の思い出」というタイトルで、およそ45分間のレクチャーがありました。

最後のフリートークでは、本番での進行について、おおよその流れなどを話し合いました。ある程度のハプニングは仕方ないとしても、やはり、全く何もない状態で本番に臨むのは不安ということで、シナリオめいたものは事前に用意する、という方向でまとまりました。また、本番一回勝負では悔いを残すかもしれないので、何らかの形で2回の本番を行うということになりました。

正直なところ、初回とこの回のフリートーキングは、かなり荒れ模様でした。担当の意図が、最初の内は発言者たちに十分には伝わっていませんでした。むしろ、美術館の担当者からは概略を示されるだけで、具体的な部分は自分たちで作り上げるように言われたり、解説する気満々だったのに、絶対に調べるな、勉強するなと言われたり、戸惑うことの方が多かったようでした。当然かと思えます。

ある程度、覚悟していたことではありましたが、最初の段階で、ある種の反発や衝突があるのはやむを得ませんでした。

「生の言葉を聞きたい」「感情をぶつけて欲しい」と、言葉で言ったところで、それは実際には容易なことではありません。特に与えられたマニュアルに添って、和気あいあいと楽しめるようなイベントに、そこまでを望むことは無理な話しです。荒療治ではあっても、最初から本音で語り合わない限り何も生まれないような場を用意する必要があると、感じていました。しかし、これは参加者たちにとっても強いストレスを要求します。それが上手く運ぶか、頓挫するか、担当にとってもギリギリの賭けのようなものでした。おそらくは、6人次第。そのような要求に堪えられるだけの人選であったかどうかが、勝負の分かれ目であろうとも思われました。

13: 転機

次の3回目まで、また、2週間があいていました。ひよつとすると、なか2週という間隔が、互いに受けた刺激を和らげ、それぞれの考えをほどよく熟成させるのに一役かっていたのかもしれませんが。相互にあった気まずさや、慣れない自己表現に気がたかぶり、やや言い過ぎたかという小さな後悔も、それぞれの根気の内に解消されていったように思われます。実際、彼らは良いチームでした。そして担当の期待に、やがて予想以上に劇的に応えてくれることになるのです。

この3回目の5月25日から、いよいよ本番に向けての作業が始まりました。まずは「何を話したいか」「どのように話したいか」など、自分の目的と希望を明確にするようお願いしました。この日、企画展示室では、展覧会自体の展示作業が進行中。その現場に移動し、開梱された作品を実際に目にすることにしました。作業の妨げにはならないように注意し、神経を使いながらでのことではありましたが、6人の発言者と作品との、これが最初の対面でした。

そして、この時間が「おしゃべりギャラリー」にとって、明らかなターニングポイントとなりました。

それもその筈で、この一ヶ月というもの、理論武装を禁じられたまま、感情だけをたかぶらせてきたのです。感覚は、この上なく研ぎ澄まされた状態になっていたことでしょう。そして今、その気持ちをぶつける対象が目の前に現れたのです。引き絞られた矢が放たれたようなものでした。作品の歴史と、6人それぞれの歴史が交差して、話したいことが次々と湧き出してくるようでした。

14: チーム

講座室に戻り、小見学芸係長から「解説会についてあれこれ」というタイトルでおよそ45分間のレクチャーを受け、その後、フリートークに移りました。その時、担当は、6人の変化を目の当たりにすることになりました。

初回から今回まで、美術館の経験豊富な上司3名をお願いして、「解説会」というものについて、経験や失敗談、参加者たちに向けてのちょっとしたアドバイスなどを話してもらっていました。それぞれ、ユニークで楽しいお話しであり、参加者たちからも好評でした。

そして毎回、解説会をうまくまとめる秘訣として「作家をめぐるエピソード」を仕入れておくとよい、聞いている方も喜ぶという趣旨のアドバイスがありました。これは至極まっ

とうな助言で、解説初心者の面々に与えるには最もふさわしい激励でもあります。初回や2回目の時は、6名もそのアドバイスの部分は大きく頷きながら聞いていました。美術館に来てから初めての（おそらくは唯一の）具体的な指示だったからでしょう。

ただ、担当は内心これは少々困ったことになったと思っていました。エピソードは、確かに便利ですし、面白い。重要な場合もあります。しかし、今回のように、情報や知識を伝達するというよりも、発言者個人の内面から出てくる言葉を伝えて欲しいと願うような場合、エピソードはむしろ、それらを覆う蓋になってしまいます。もちろん、いただいたアドバイスは疑う余地なく正しいことでもあり、その辺りのニュアンスを伝えあぐねて悩んでいました。

しかし、この日のフリートークの時、担当は参加者たちが一ヶ月前の彼らとは明らかに違うのだということを思い知らされることになりました。誰が言い出したのか、彼らの方から「あの、本番では、今日、絵を見て感じたことを話せばいいですね？」という声が上がりました。

担当、少しビクビクして「もちろんです。何でも言って下さい」。

別の声が「私、いいと思ってたものが、実際見たら、ちっとも良くなかったんです。作品、変えてもいいですか?」「もちろん、いっこう構いません。……だけど、良くなかったと、そのまま言ってもいいですよ。どう思おうと間違いじゃありませんから」「その絵、良くなかったかなあ。僕はいいと思うけどなあ」「だけど、あれは……」「あつ、お二人とも、どうせだったら、その作品の前で議論ははじめちゃってもいいですよ。せっかくだから、他のお客さんもいる前でパアッとやりましょう!」

それまでに下地が準備されていた興奮の、行きつく道が見えてきたのです。初回には、なかなか口を開くのが大変だった小林さんも、今では積極的に話しに参加しています。メンバーに共通のヴィジョンが現れてきました。議論を促された一人、松永さんは、腕組みをしたまま担当の目を見つめ返してきます。もう一方の論客、黒柳さんは、ぐっと片眉を吊り上げてみせました。最年長の山本さんの方を見ると、大きく頷いてくれました。

「やりましょう」。胸がいっぱいになり、もう一度、それだけ言うのが精いっぱいでした。

もう引き返せません。鑑賞者だったはずの6人は、いつの

間にか、すっかり共犯者になっていたのです。

15: リハーサル

今回は、その一週間後の6月1日でした。これまでは2週間おきでしたが、本番が近づくにつれ、メンバーが顔を合わせる間隔も狭まっていきます。

しかも、その間の5月27日には、展覧会のオープニングがありました。自由参加でしたが、完成された展示室を早く見たい方には来ていただきました。本番で論戦を行う予定の二人も、来てくれました。当初から意見がぶつかりがちの彼らでしたが、好敵手として意識するようになってから、また不思議な連帯感も芽生えているようでした。

準備段階としては最後となる6月1日は、リハーサルの日でもありました。はじめに6人の具体的な希望、たとえば「どの作品(あるいは分野)について話すか」「何点くらい話したいか」などを、それぞれ自己申告。それに基づいて、簡単な構成を考えました。この辺りになってくると、メンバーそれぞれの好みや話しぶり、キャラクターなどがお互いにわかってきます。それらを踏まえての組み立ては、譲り合いつつ、思いの外スムーズに決まっていきました。

その後、展示室に移動してリハーサル。展覧会がすでに始まっていることもあり、他の来館者の方々もいる中を、担当含め8名が打ち合わせながら歩くのは、なかなか気を遣います。余り大きな声も出せませんでしたが、すでにチームは、

そんなことではへこたれませんでした。会場をぐるりと回りつつ、順番に小声で話しながら、それぞれの受け渡しのタイミングなどについて、綿密に打ち合わせをしていきました。

講座室に戻り、それぞれの話しの内容などについて意見交換。若干、変更などを加え、最後に、専門用語をできるだけ使わないこと、移動の際に作品の保全に気を配ることなどを改めて確認して、あとは本番を待つばかりとなりました。

16: 当日

6月8日。本番一回目。直前の緊張ぶりは、見ていて痛々しいほどでした。刻々と近づいてくる時間の中で、互いに健闘を誓い合います。

当日の入館者総数は、589名。イベント開催中の2時から3時までの間に、その内のどれくらいの人数が企画展示室内にいたのでしょうか。見たところ、発言者たちの周囲には、常に20~30名くらいの来館者たちがいて、話を聞いていました。中には、最初から最後まで彼らと一緒に歩き通してくれた方もいました。

館内アナウンスを、30分前と直前にかけて来館者の注意を喚起し、2時ちょうどに彼らの冒険は始まりました。

担当が、今回のイベント「おしゃべりギャラリー」の趣旨を手短かに説明し、6人の発言者たちを紹介します(fig. 3)。そして……



fig. 3 6人の紹介。緊張もピーク



fig. 4 ゴッホの前で

17:本番

まずは山本さんが、ゴッホとセザンヌの風景画の前に立ちます。前年まで学校の先生だった山本さんは、どうしても彼らの生地や生年から話しを始めてしまうのでした。まるで、セザンヌについて語る前に自分の話しをするのは失礼だともいうように。しかし、その姿は堅苦しいものではなく、その実直な人柄に裏打ちされて、逆に個性的でもありました。ゴッホの話しから、やがてゆるやかに、自身の少年時代の思い出へと話題は流れていきます。最年長の山本さんは、その端正な語り口によって、トップバッターの重責を見事に果たしてくれました (fig. 4)。

続いて黒柳さんが、キルヒナーの木影の方に皆の注意を向けます。ゆがんだ人体、苦しそうな表情。それを見て、自分がどう感じたかに、いきなり切り込みます。作品の制作年代が違うのと同様に、それらを語る二人の男性の年代も違います。黒柳さんの語り口は、熱く、そして、後半の舌戦を予感させるものでもあります。

そして、カンディンスキーの前では長谷川さんが、まるで音を聞いているみたいだ、と静かに語り始めます。それから、シャガールの代表作《7本指の自画像》へと来館者を誘導します。かってスキー場からの帰り道、偶然に見たシャガールのこと。そして、自分自身の変化に応じて、見るたびに受ける印象が違うこと。長谷川さんの口調は淡々としていますが、いつでも自分の言いたいことを的確に表現されます。おそらく平素からお仕事の場面で鍛練されてきた方で、そういう意味では、準備の段階からメンバーのバランスを調整してくれる、極めて大事な存在でした (fig. 5)。



fig. 5 シャガールと向き合う



fig. 6 見たことのない作品ばかり…

余り知られざる20世紀のオランダ画家たちのコーナーでは、敦井さんの話術が光ります。実はかなりの美術通。国外の美術館を訪れた経験も多く、誰よりも豊富な知識の持ち主です。そんな敦井さんだからこそ、逆に、知識ではなく感覚で語って欲しいという担当者の意図をいち早く理解してくれたのでしょう。さらには、知名度の低い画家ばかりが並ぶオランダ美術の部門を率先して引き受けるなど、終始、非常にクレバーで洗練された振る舞いをしてくださいました (fig. 6)。

戦後の美術のコーナーでは、コブラを前にして黒柳さんが再び登場。黒柳さんは全編を通して登場して、各々をつないだり、かき回したりする役割も担っているのです (fig. 7)。



fig. 7 見上げて話す大きな作品



fig. 9 対峙するノコギリ

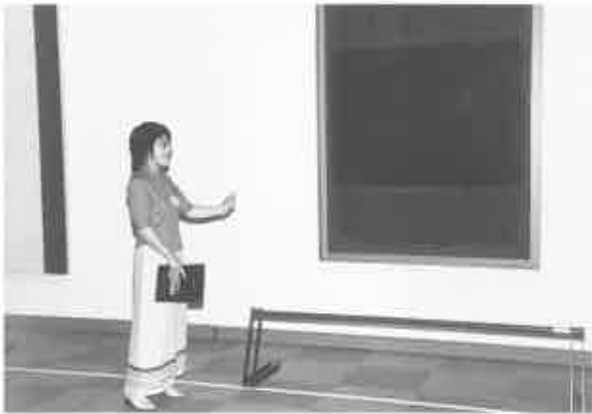


fig. 8 ロスコを語る



fig. 10 バトル開始

そして、その黒柳さんの言葉を引き継ぎながら、マーク・ロスコの絵の前に立つ小林さん。最初の日には、自己紹介もやっとならした。終始うつむき、ほとんど涙ぐまばかりにしている姿を見て、担当は大変な悪さをしているような罪悪感に襲われたものです。しかし、殆どお嬢さんといってもいい年齢の小林さんは、今や抽象表現主義の作品を、自身の体験に照らし合わせながら語っています。一言一言ゆっくりと。難しいと思って敬遠していた絵も、子供と一緒に見るようになったら、その目線に導かれて距離がぐっと縮まったという論旨は、実体験に基づいた言葉だけに説得力がありました (fig. 8)。

そして、オルデンバーグの巨大なノコギリを受け持ったの

が、6人目の松永さん。細身に白いシャツとジーンズ姿が印象的で、滅多に笑顔を見せない松永さんは、鋭い感性の持ち主です。たとえば年齢や、子育て終了という履歴から一般に想像されるタイプとは違っているかもしれません。腕組みをして、しばらく考え、一気に話す。最初の日から、自分自身の言葉で話しをしようとしていた、という点で、まさに「おしゃべりギャラリー」の牽引力そのものでした (fig. 9)。

そして、リクテンスタインからクネリスへ。好戦的とも聞こえる松永さんの言葉に、黒柳さんが絡んでいくのです。「そうかなあ。僕は違うと思うなあ」と言いながら (fig. 10)。

18: 終わって

担当としては、この日の出来映えに十分に満足していました。他の一般来館者たちも、6人の話しに熱心に聞き入っていたし、最後には期せずして暖かな拍手もわき起こりました。しかし、最初の本番が終わったこの日、当の彼らは皆、やや不完全燃焼感でした。「あそこで、こう言うはずだったのに」「ここは、もうちょっとこうしておけば……」など、終了後の講座室は、完全に反省会のような感じでした。しかし、そういうこともあるかと、二度目の本番を用意していた筈です。(それを最終的に決定したのも、この6人自身でした)。次回ももっと上手くやろうということで、この日はお開きとしました。

そして、事実、次回の6月22日はさらに素晴らしい仕上がりでした (fig. 11-16)。

全体の受け渡しがスムーズになり、アドリブが格段に増え



fig. 11 2回目の本番。平成9年6月22日 (日)



fig. 12 自然とポーズも…

ました。そして、黒柳さんと松永さんの論戦はますます白熱し、ついには周囲の来館者たちまで巻き込むほどになりました。飛び入りで、議論に参加する人までが現れてきたのです (fig. 17)。

全てが終わった後、今度ばかりは6人とも充足した様子でした。やるべきことを全てやった、という感じでしょうか。美術館2階のレストランでお茶を飲みながら、今日のこと、これまでのことを飽きることなく話しました。少し、興奮きみだったかもしれません。

こんなことを思い出します。ちょうどそこに居合わせた美術館職員の一人が、こういうイベントを行う意義について質問をしました。いつものように担当が答えようとした時には、すでに他のメンバーたちが間髪をいれずに答えていました。それも口々に。担当の出る幕はありませんでした。

そして、心地よい興奮に包まれたまま、全ては終わりました。終わった後には、担当の中でも、何かの優先順位のようなものが大きく変わっていました。それは、企画当初には想像もしていなかったことでした。

19: 宴の後

6人の、一般から選ばれた発言者たち。彼らが、企画の意図を十全に理解し、さらに、この経験を十分に楽しんでくれたことについて、私は些かの疑いももっていません。

しかしながら、地域社会において、自分の感性を大切に意識し、さらに、それを何らかの形で表現していくことの喜び



fig. 13 12本の指がロボを指す



fig. 14 気持ちがかもります



fig. 15 ギャラリーを引きつれて



fig. 16 腕組みは考えている証拠



fig. 17 たまらず参戦!

を知ることは、必ずしも幸福になることを意味しません。たとえば、彼らが周囲の人々に今回の体験を伝えようとしても、うまく伝わらなかったり、全く受け入れられなかったとしても、あながち不思議ではないのです。もしかすると、むしろこの体験こそが、実生活上の小さな孤独の種となった可能性さえあるでしょう。(そうではなかったことを信じていますが……)。

そういう現状であれば、こういう企画をしたこと、また、それが強く参加者に訴えかけたことをもって、イベントの成功として単純に喜ぶことはできませんでした。自身の感覚を掘り起こす喜びを伝えたい。けれど6人のメンバーの、個人の感情的な部分にまで立ち入ろうとしたことは、担当のエゴではなかったと断言できるでしょうか。何かを人に勧める

時に、それが他者への侵害となっていないかを自問する必要があるのは、個人でも美術館でも同じでしょう。彼らや、たとえば小林さんが腕に抱いていた赤ちゃんの先行きの幸不幸にまでは、美術館は責任を持ってないのですから。

5年たった今になっても、責任を負えないからこそ、参加してくれた人たちを孤独のままに閉じこめておくことがないように、こういう機会を継続する努力を続けなくてはならない、と思うのが精いっぱいのところ。少なくとも、担当者自身は同じスタンスを保ち続ける努力をしなくてはなりません。それは、実際に口に出された訳ではありませんが、心の中で、6人の発言者たちとの大切な約束のようなものになっています。

☆彫刻を遊ぼう！

1：再度、今度は

内心に留保をつけながらも、「おしゃべりギャラリー」の体験が、担当にとって忘れられない、心躍る出来事であったことは間違いなく、すぐに別の形で次の段階へ進みたいとたまたまなくなっていました。根本的な疑問が、どうしても一つ、手元に残っていたからです。

「おしゃべりギャラリー」は、一般公募した発言者による解説会であり、展覧会の鑑賞という場を用いての双方向性の試みでした。その意義は感じましたが、当然のこととはいえ展覧会をはじめから「前提」として厳然と存在していました。

「おしゃべりギャラリー」の興奮によって欲が深まっていたのですが、担当の中では、展覧会自体が鑑賞者の積極的なアプローチによって成立するような、双方向の矢印を含み持つような、そんな展示ができないものか、という気持ちが膨らんでいたのです。

2：イメージ

といっても、最初から明確なイメージがあったわけではありませんでしたが、いくつか、その断片のようなものがありました。

- ・企画展として、大々的に行うべきか？ 実験的な試みをしようとする以上、大きな予算を使うのはリスクが高い。それに展覧会を望むとなると、いつ実現するわからない。
- ・また、企画の性格からいって、特別な作品をチョイスして、借用しなければ成立しないような内容では意味がないようにも思われる。たとえば、普段は収蔵庫、あるいは展示室にあるのが当たり前前の所蔵品で、私たち自身「こういう作品だ」と思い込んでいるようなものの方が面白いのではないか。来館者にとっても、私たちにとっても、何かを発見する可能性、予想外の驚きが生まれる可能性がある
- ・会場の広さも、むしろ、面積が大きすぎない、親密な空間が望ましい。広い会場では、担当者が構成をしたり、流れの方向付けをすることが必要以上に求められ、結局、美術館側の恣意が勝ちすぎてしまうことになるかもしれない。とはいっても、個々の作品に対して、自由にアプローチできるだけのスペースは必要である
- ・そして何よりも、来館者の一人一人が、最終的にそれぞ

れ異なったストーリーを組み立てられるような内容になるならば、それが何よりではないだろうか……

少しずつ考えを具体的にしていきつつ、「おしゃべりギャラリー」の余韻も消えやらぬ平成10年の夏、今度は常設展示室の一室において計画を実行に移すことにしました。

3：計画

ただし、所蔵作品を使用する以上、他の常設展示プランの妨げになるようなことがあってはいけません。少なくとも、同じ時期に他室で展示される可能性が高い作品群を使うわけにはいきませんでした。

新潟県立近代美術館の3つある常設展示室のうち、日本画・工芸・書を主に展示する「展示室1」と、版画・写真のための「展示室3」は、展示替えの回数も多く、慢性的にコマ不足です。限られた作品を目新しく見てもらうためには、常に工夫する必要があります。

一方、洋画や彫刻に充てられた「展示室2」は、正反対の悩みを抱えていて、館内の所蔵品の過半数はこの部屋に割り振られている上に、文字どおりに「常陳」を期待されている作品も集中しているため、なかなか展示しきれない作品が多くあります。コーナーを3ヶ月に一度ずつ展示替えするなどの努力をしても、面積的に限りがあり、全てを出すことは難しく、特に、彫刻のようにある程度の空間を必要とするものは、ロダンなど一部の作品を除けば、なかなかまとめて出す機会がありませんでした。

そういうことを考え合わせ、通常は主にグラフィックの展示スペースに充てられている「展示室3」に数点の彫刻作品を展示し、それらを使って、上述したような鑑賞者によって完成される、双方向の形式の展示をしたいと提案しました。それが、「彫刻を遊ぼう！」というタイトルをつけた試案となりました。

4：館内調整

しかしながら、今回の調整は「おしゃべりギャラリー」の時以上に難航しました。所蔵作品をどう扱うかという問題が絡んでいるため、事前にしっかりとコンセンサスを得ておく必要がありました。

時間がかかることをある程度予想して、実際に会期の半年前の学芸会議から、検討してもらいましたが、すり合わせに

かけた時間の長さは、ほとんど、実現困難と思われるほどでした。もちろん、「おしゃべりギャラリー」の時と同様に、これは大事なステップでした。その手間を省略していたら、おそらく中途半端なものに終わっていたかもしれません。

たとえば、「触る」ことまでを認めるかどうかという点は、一つの焦点でした。当時すでに、たとえば視覚障害者の方を対象とした「触れる彫刻展」など、興味深い試みが各地で開催されている実例があって、そういうことを当館でもやってみたい、という色気もありました。

しかし結局、作品保全の問題や、今の段階で当館で行う意義などに関する疑問を払拭するだけの説得力はもてず、数度に渡る代案の提出もむなしく、この点だけは実現に至りませんでした。しかし、逆にメリットもありました。「触る」ことを途中で諦めたために、ブロンズや、せいぜい石彫の一部のみと考えていた作品の選択の幅を、大理石などにまで広げることができたのです。ブロンズ、木彫、石彫、テラコッタなど、さまざまな材質の彫刻作品が展示室には並ぶことになりました。

5：展示構成

4月1日付けの打ち合わせ用資料では、この企画の趣旨と内容として「彫刻の持つ特徴と可能性を考え、それらを生かすような作品選択、および展示を試みる」「鑑賞者が、何らかの形で参加しうることを目的とする。(強制はしない)」などを挙げています。幾度かの修正を加えて、最終的には、さほど広くない「展示室3」に、全部で7点の彫刻を展示することにしました。1点ごとに独立させた展示とし、それぞれに表示をつけます。

さまざまな素材があることから、「ブロンズ」「大理石」「テラコッタ」など、素材についての簡単な説明パネルを掲示しました。また、よくある質問を想定して、Q&A形式にしたA5版の大きさの配付資料を、別途用意しました。それらはある種のアリバイだったかもしれませんが、その分、作品の展示自体は、かなり思いきった形にさせていただきました。

やはり、調整に時間をかけたただけのことはありました。問題点の拾い出しと、その対処法の検討に時間をかけたおかげで、実際に「彫刻を遊ぼう！」を開催していた3ヶ月の間には特別の問題もなく、むしろ、たくさんの応答をいただけることになりました。

6：同じポーズをしてみよう＝聞こえてくるのは何ですか？

～林昭三《おと》

部屋に入った来館者が、まず目にするのがこの作品。台座部分を含めて高さ180cmを越える木彫です。右手を耳にあてて、何かの音を聞き取ろうとしている少女の姿が表されています (fig. 18)。

ほぼ等身大のこの作品の前には、それがスッポリと納まるような、素通しの木の枠を置きました。その隣には、全く同じ木の枠に銀色のスクリーンを貼ったものを並べます。これが鏡の代りになり、彫刻の少女と同じポーズをとった自分を見ることができます。

ロダンの《考える人》などもそうですが、見た目には自然なポーズに見える彫刻なのに、実際にその姿勢をとるのが難しいものがあります。造形上の要請から作家が加えた必然的なデフォルメですが、それは、実際に自分でやってみることによって、容易に実感できるものです。

二つの木枠は、角度をつけて、ずらして並べ、立つ位置によって見える角度も変化するようにしておきます。



fig. 18 このポーズは意外と難しい

7：光をあてると……＝陰影～北村四海《すみれ》

高さ51cm。大理石の女性の頭部像です。

この作品はライティングを落とし、その代わりに、ペンライト2つを、作品から離れた場所に鎖で固定しました。それを用いて、来館者が自分で前後左右、あるいは上下から光を当てることができるようにします。

きわめて上品な表情をした女性の頭部像ですが、ライトの当て方次第では、かなり印象が変わります。脇には「光をあてて、顔の表情がどう変わるかを見てみましょう」という表示を添えました。

8：光をあてると……＝影絵～細野稔人《鳥を呼ぶ少女》

鳥を手にした少女の座像です。足を投げ出した状態で横に細長いブロンズ像で、作品自体の高さはさほどではありませんが、立派な台座によって、全体が目線の高さにまで持ち上げられています。やや仰向き加減の少女の身体は、腰の部分で支えられ、両足が前に投げ出されているため、宙に浮かんでいるような、不安定感が特徴になっている作品です。

これも、光の当て方を変える趣向です。上部からのライトは淡く押さえて、少し離れた足下からスポットライト2灯を当てられるようにしました。それらはボタンで0～100%の調光ができるようにし、右を強くすれば、作品の左側の背後の壁に、左を強くすれば右側の壁に、作品の不安定な形状をさらに拡大したような影が濃く映る仕掛けになっています。

9：上からと下からの眺め～戸張幸男《片隅の男》

あぐらをかいた男性のブロンズ像です。何か、心に鬱屈するものがあるのか、背中を丸め、顔をうつむけ、うなだれています。みっちりとおなかがつまって、大変に重い作品ですが、高さは110cm程度。普通に立って見る時には、うつむいた頭を斜め上から見おろすような感じになります。そういうわけで、この《片隅の男》の顔は、あまり知られていません。

それで、この作品については、作品を見る目線の高さを変えてもらうことにしました。作品の傍らに、しゃがんで顔を見上げるポイントを示し、一方、大きくて頑丈な、子どもたちが乗降しても大丈夫な階段も傍に置きました。下から見上げたり、上から見下ろしたりしてもらおうということです（fig. 19）。

普段から、子どもと大人、背の高い人と低い人では同じ作品でも違う形で見ているわけですが、そのことを、私たちは



fig. 19 3mの高さから見下ろす

余り意識していません。

10：さわってみちゃう？～明田川孝《若き蒙古》

展示室内で、常時「触る」ことができるような展示はできませんでしたが、週一回の解説会の時間にもみ、表面の感触を確かめてもらうことで、それに替えました。作品の脇には「木曜の午後2時にここに来ると、ちょっとだけ作品に触れてみるができます」と表示しておきました。平素はアクリル・カヴァーを被せておき、解説会の流れの中で、覆いを外す形としました。その時には手袋の着用と、また、今だけ特別であるという点を了解してもらいました。

11：同じポーズをしてみよう＝何を考えているの？

～寒川典美《くぐつ》

高さ103cmのテラコッタです。銃剣の身を預け、頬杖をつくようにして、遠くを見つめています。四方のぞきに入れて展示室の中央に置き、360度全ての方向から見られる姿を確認してもらいました。これには「ぐるっと回ってみましょう。皆さんは、どこから見るのが好きですか？」という表示を添えました。

12：何だ!?～マックス・エルンスト《……》

そして、最後の作品がマックス・エルンストのブロンズで



fig. 20 マックス・エルンスト (……) ブロンズ 1934/35

す。この作品を出すことは、企画当初からの念願であり、最もやりたかったことでした (fig. 20)。

このエルンストの彫刻は、何とも奇妙な、しかし確かにある種の生き物を表したものです。この作品には、もちろん、当館で使用している題名があります。それを記したキャプションもあるのですが、しかし、この展示の時には、そのキャプションのタイトルの部分には紙を貼って見えないようにしました。作品の題名は、来館者たち自身に考えてもらおうというわけです。

人は、何かに名前を付けようとするとき、自然とその事物



fig. 21 初日

の本質について考えを巡らすものではないでしょうか。そうでなければ自分の本質、あるいは、自分の夢や願望といったものが、名付けの作業には反映されるように思います。相手が美術作品であっても、おそらく、そのような心理は働くものと思われ、また、全ての情報が与えられている時よりも、「名前をつける」という能動的な行為を通すことによって関わり方は一層深さを増すのではないかと、というのが狙いです。相手が反具象の、何かよくわからない彫刻であればなおのこと、一筋縄ではいかずに、反応も多様なものとなるでしょう。

作品の隣の壁には、大きなバックパネルを吊り、傍らに様々な色、形、大きさの付箋と鉛筆を用意しておきました。作品を見た鑑賞者は、エルンストのブロンズに思いおぼい名前を付けて、付箋にそれを書いて、パネルにぺたぺたと貼っていくことができるようにしました。

どんな反応が返ってくるのか。これは、やってみなければわからない、と思いました。

展示替えが終わった時、はじめは呼び水が必要だろうということで、まず自分たちから始めることにしました。その日展示を担当してくれた新潟日通の作業員と、担当が考えた名前が、まずは、そこにべたりと貼られました。翌日から、来館者がどのくらい応答してくれるのか、とても心配だったのを覚えています。

13: 付箋、付箋、また付箋

しかし、その心配は杞憂でした。翌日から着実に、パネルには付箋が貼られていきました。それらは着実に増えていき、



fig. 22 次の日には…

数日でパネルに余地がなくなってしまう、心を痛めながら、一部を剥がさなければいけないほどでした (fig. 21-22)。

特に、子どもたちの団体が来た後の付箋の増え方は尋常ではありませんでした。みんな我もわれもと書くからです。もちろん、その場合はふざけた内容のものも多いのですが、しかしながら、自分で絵を入れたり、こちらがビックリするような発想のものを見つけたり、毎日、夕方にパネルを点検して、その日一日の成果を読むのがとても楽しみでした。

ただ、どんどん増えていく付箋を、順次はがしていかなくてはならないことだけが残念でした。付箋をはずすにあたっては、内規のように一定の規則を設けました。まず、有名人以外で個人名を上げているもの、特に他人への誹謗・中傷と思われるものは、見つけ次第、無条件に剥がすことにしました。それから、小学生男子が書いたと推測される、余りにもくだらない下ネタの類も(中には笑えるものもありましたが)撤去しました。また、日を重ね、付箋の数が増えていくにつれて、偶然にも複数の人が思いつくような人気の高い名前というのが出てきました。そういうものも、一部を残して、順次はがしていきました (fig. 23)。

週末などは、朝にだいたい整理したつもりでも、夕方には、またパネルをはみ出し、高く盛り上がるほどに増えていて、うれしい悲鳴という状態でした。

そうやって外した付箋は、公表するものと、上記の中傷の類のような公表しないものに分け、前者は簡単に分類してリスト化しました。平成10年からしばらくの間は、そのころ立ち上げたばかりの当美術館のホームページ上に載せてもらっていました。また、このたび再度、当館のホームページ



fig. 23 日課となった剥がし作業

上のライブラリーに掲載されることになっています⁽²⁾。

14: なかよし

大人も子どもも皆、このエルンストの彫刻の名前を、本当に色々と考えてくれました。総数は、公表できるものだけでも、ざっと1500枚にのぼります (fig. 24-25)。

さまざまなパターンがありましたが、やはり、多かったのは「鳥人間」「さかな人間」の類です。改造人間パターンとでもいいですか、例をあげれば「かじき人間」「ハエトリオトコ」といったものです。

動物に比重が置かれた場合、「カッパとカメレオン」「カジキとついでう」「半ざる半魚」「でこ蚊」など、魚類・爬虫類・両生類に人気が集まりましたが、やはり鳥関係は別格でした。「本の中に鳥」「くちとり」「かっこうかべとり」「キツツキと森の木」など、様々な種類の鳥が登場しています。

人間に比重が置かれたものも多く、「かべにうまった人」「ひげの下の住居人」など。中でも「顔」には、「ひらたいかお」「ハカゲの顔」「かのかお」などのように注目が集まっています。さらに「目」は印象深いようで、「カエルがカをねらう目」「目からはかいこうせんうつぞー」「明日を見つめて」など、目そのものと、見る行為の双方に関心が分かれました。

「平面顔星人」「うちゅうげんじん」「NTT不明人間」など、宇宙人を含めた未知の生物系がありました。キャラクター関係では、「食パンマン」「Pちゃん」「スペースガチョピンスーツ」「つぶれたウルトラマン」など。もちろん、他を圧倒して多かったのが「ぬりかべ」です。「ぬりかべとカメレオン」「よきなぬりかべ」「ぬりレオン」「口ぬりかべ」etc.

非生物の分野でも「壁」は強く、「はなながかべたろう」「鳥にのろわれたかべ」「心のかべ」「かべかべー」など。「まないた」や「人面カード」なども、わかりやすい例でしょう。その他、非生物系は「はと時計のきもち」「でんしゃのまど」「あぶらあげちゃん」など多様です。

「人面角!」「たいら」「扁平ギュー」などは、形態的な特徴を捉えたもの。「つきささる」「侵食」「こわい」など、感覚的な受けとめ方もありました。「世紀末」「おひょい」「多相と可能性」「ぼくは何?」あたりになると、もう哲学的ですらあります。

そして、面白いことに、数が増えていくにつれて、ある傾向に気がつきました。「合体!」「鳥となかよし」「ゆうごう!!」「ふれあい」等々、この作品を、複数のものが混じった形で

(2)アドレス <http://www.lalanet.gr.jp/kinbi/index.html> (2002.3.31現在)



fig. 24 一部ですが…

ある、というだけではなく、それらが互いに思い合っている
と捉えたタイトルが、けっこう多かったのです。「友情(もし
くは種をこえた2人の交流)」という発想を、もしもエルン
ストが聞いたら、何と答えてくれるでしょうか。

「パリの能面」とか、「うちゅちゅしている人」のように、
一撃で担当をノックアウトしたものもあります。意味は全然
わかりませんが、思いがけず「うちゅちゅ」という言葉を差
し出される以上の喜びが、この世にあらうとは思いません
でした。

15: ふたたび宴の果て

幸せな3ヶ月間は、あっと言う間に過ぎていきました。美
術館で迎えたどんな夏よりも、熱い夏でした。ひたすら発信
しようとしていたら、おそらくできなかったであろう経験を、
ひととき受信者となることで体験できたのです。何よりも、
鑑賞者の持つパワーの大きさに、驚きました。展示会の来館
者数を別にすれば、私たちはそのパワーをきちんと受け止め
てこなかったようにも思いました。

そのパワーを生かさなない手はないと思う一方で、この試
みの実現までに要したエネルギーが膨大であったことも、また
事実でした。来館者のパワーに対抗しつつ、いざという時
にはそれらをコントロールする必要もあるわけで、準備にか
ける時間を含めて、担当が担うべき責務は大きく、正直くた
びれてしまったというのが実情です。

気持ちが先行するのはいたしかたないとしても、担当する
学芸員自身が強く、大きくならない限り、せつかくの鑑賞者
のパワーも、それを受けとめ、生かしていくことはできない



fig. 25 未来の河童!

のではないかと、さもないと、つい観念的に、小手先で処理し
ようとしてしまうのではないかと、という自戒があります。

常に自己を解体する勇気をもって、全力で作品にも来館者
にもかかわっていくこと。そして何より、継続こそ力。今は
想像もつかないような方法が、まだまだ残されているに違い
ありません。

「彫刻を遊ぼう！」の時、エルンストの傍らのパネルの上
で、もくもくと増殖していく付箋の山を見つめながら、「美術
館の可能性は無限大だ！」と思った気持ちを忘れさえしな
ければ。

「おしゃべりギャラリー」に参加してくれた6人の方に、心からの御
礼を申し上げます。最高のメンバーに最高の時間をいただきました。
「彫刻を遊ぼう！」では、行幸中の官様にも、遠足が雨天中止にな
った小学生たちにも、それぞれの見方で鑑賞していただいて幸福で
した。それから、手元に残る付箋の山。それは今でも、どの方向に顔
を向けて仕事をすべきかを、力強く示してくれています。そして、ど
ちらの企画でも一緒に担当をしてくれた藤田裕彦主任学芸員の理解と
協力なしには、おそらく何も実現できなかったであろうことを、感謝
とともに記したいと思います。